

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 4月30日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22520566

研究課題名（和文）

コミュニケーション方略としての「言い換え」の指導内容と指導方法に関する研究

研究課題名（英文）

A study on the syllabus and method of teaching paraphrase as a communication strategy

研究代表者

高塚 成信 (TAKATSUKA SHIGENOBU)

岡山大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：70132652

**研究成果の概要（和文）：**本研究は、日本人英語学習者が、自分の言いたいことを英語で表現するための語彙・文法を知らない、あるいは、知っているのに思い出せない時に、知っていて使える別の語彙・文法で言い換えることでどのように問題を回避・解決することができるのかを、中学校・高等学校英語教科書において使用されている言語材料（語彙・文法）を用いて明らかにするとともに、6年間の英語学習を通じてどのように系統的に学習することができるのかを、「言い換え」指導・学習用テキスト『中学1年生から高校3年生まで6年間で学ぶ英語の「言い換え」—自分の英語力で何とか言える発信力をめざして—』を作成して示した。

**研究成果の概要（英文）：** This study has demonstrated that many of the words and grammar points Japanese learners of English see and learn in their junior and senior high school textbooks can be used to solve problems they encounter in expressing ideas for which they do not know or fail to activate words and/or grammar points by using whatever alternative linguistic resources they have at their disposal. Based on an analysis of the words and grammar points in the textbooks which are potentially useful for paraphrase, the study has also produced a material for teaching and learning paraphrase, from Grades 7 to 12, as a communication strategy to compensate for unavailable words and/or grammar points.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	300,000	90,000	390,000
総計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：英語教育学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：言い換え（力）、コミュニケーション方略、指導・学習用テキスト、到達判定テスト

### 1. 研究開始当初の背景

本研究開始の背景には、日本人英語学習者に関する次のような2つの課題がある。

#### (1) 語彙・文法活用能力の低さ

我が国の中学校・高等学校の英語教育上の課題として次のことが指摘されている。

「コミュニケーションの中で基本的な語彙や文構造を活用する力が十分身に付いていない」

(「中央教育審議会教育課程部会審議のまとめ」, 2007年11月7日)

すなわち、知識としては持っていますが、実際には使えない語彙・文法が多く、目標とする実践的なコミュニケーションが養成されていないと思われるということである。

その原因の一つとして、文法指導の伝統的な方法である、目標文法項目を提示(Presentation)、練習(Practice)してからコミュニケーションの中で産出(Production)させる、所謂「PPPアプローチ」がまだ支配的で、学習者は、使用する文法項目を教師から与えられた形で言語産出しており、自分が表出したい意味を、既習の言語的資源の中から適切な語彙と文法を自ら選択して言語化することを通して、内在化した知識を自動化させる機会が十分に与えられていないことが挙げられる。

言語産出は、リアルタイムでの意味を知識として持っている言語形式に変換する言語処理プロセスであるが、自動化していない知識は言語産出に使えず、次々に問題に遭遇することになる。その際、問題の解決に有効になるのが、コミュニケーション方略としての「言い換え」、すなわち、伝えたい意味を自分が持っている言語的資源を総動員して、使える語彙・文法で言語化することであり、「言い換え」能力を向上させる指導の工夫が実践的コミュニケーション能力養成において非常に重要なものとなる。

## (2) 「言い換え」の体系的指導・学習の欠如

しかるに、中学校・高等学校6年間の英語教育を通じて、「言い換え」の指導・学習は体系的に行われることはなく、指導・学習用のシラバスやテキストもない状態である。その結果、生徒は知っている語彙・文法を十分に活用することができない状況にある。

したがって、生徒が教科書を通して学習する語彙や文法を使って、どのように「言い換え」が可能なのかを明らかにするとともに、その分析に基づいて中高6年間の体系的な「言い換え」指導・学習のシラバスとテキストを作成することは、以上の課題を克服する上で、非常に重要であると思われる。

## 2. 研究の目的

そこで、本研究の目的を、次の2つに設定

した。

### (1) 「言い換え」による問題解決の可能性の検討

日本人英語学習者が、外国語としての英語による言語産出において遭遇する問題を、「言い換え」というコミュニケーション方略によってどのように解決することができるのか、その可能性を、意図した意味、言語的問題、使用できる言語的資源(中高の英語教科書の語彙・文法項目)、3つの関係において検討すること。

### (2) 「言い換え」の指導内容と指導方法の開発

「言い換え」による問題解決の可能性検討に基づいて、日本人英語学習者の言語産出における問題解決行動としての「言い換え」能力をどのようにすれば向上させることができるのか、中高6年間のスパンで英語指導・学習における「言い換え」指導・学習のシラバス、テキストを開発すること。

## 3. 研究の方法

以上の目的を達成するために、本研究は、次の2つの研究方法を用いた。

### (1) 「言い換え」のための言語的資源の抽出

「言い換え」とはどういう言語的操作なのかを、意図した意味、その言語化における言語的問題、使用できる言語的資源との関係において、「言い換え」に使える語彙・文法項目を、中高6年間の教科書本文から抽出する。

### (2) 「言い換え」の学習・指導用教材の作成

それに基づいて、中高6年間の一貫した「言い換え」指導・学習シラバスおよび具体的な指導・学習用テキストを作成する。

その際、各学年末およびコース末(高校3年修了時)に到達すべき「言い換え」能力レベルを設定するとともに、到達判定テストも作成する。

## 4. 研究成果

### (1) 研究の主な成果

#### ① 「言い換え」のパターンと使用できる語

## 彙・文法項目の抽出

### ・「言い換え」のパターン

先行研究に基づきながらも独自に、以下の「言い換え」のパターンを設定した。

- パターン 1 : 品詞を換える
- パターン 2 : 上位語を使う (より一般的な言い方をする, 一般化する)
- パターン 3 : 説明する (上位語を修飾する)
- パターン 4 : 例を挙げる (具体例を挙げる)
- パターン 5 : 主語を換える (主語の分割, 主語の統合, 主語の入替)
- パターン 6 : 文を分割する
- パターン 7 : 間接的に述べる (理由・前提を述べる)
- パターン 8 : 文を統合する
- パターン 9 : 同意語 (同意表現) を使う
- パターン 10 : 反意語を否定する・逆の言い方をする
- パターン 11 : 文の種類を換える (肯定文を否定文に, 疑問文を平叙文に)
- パターン 12 : ダイクシスを使う・使わない
- パターン 13 : 節を句に・句を節に換える (品詞の変換を含む)
- パターン 14 : 婉曲的・比喩 (直喩・隠喩) 的に述べる
- パターン 15 : 数字を使う

### ・「言い換え」のための語彙・文法

中学校および高等学校の英語教科書から、以上の「言い換え」を言語的に実現するのに使用できると思われる語彙および文法項目を、「言い換え」のパターン、学年毎に抽出し、「言い換え」学習・指導教材作成の基礎データとして利用した。

## ② 「言い換え」指導・学習テキストと「言い換え」能力レベル到達判定テストの作成

生徒が6年間で学習する語彙・文法を使って、どのように「言い換え」が行うことができるのかを具体的に示すとともに、高校卒業時において達成されるべき「言い換え」能力を「言い換え」の殆どのパターンについて、高度な者でも、自分で操作することができる。教科書本文の多くの英文を「言い換え」のパターンを適切に使って、よい簡単な表現に言い換えることができる。また、情報や(自分の)考えを伝えるとき、「言い換え」のパターンを適切に使うことができる」とし、逆算して、各学年末に達成すべき「言い換え」力の到達目標を設定した。

次に、それに向かってどのような内容で学習・指導すればよいのかを、先に述べた教科

書から抽出した「言い換え」に使用できると思われる語彙・文法事項を参考にしながら、教材を作成した。

また、15の「言い換え」の手法が、スパイラルにユニットに配置し、繰り返しと発展によって定着が図られるよう工夫した。

なお、設定した「言い換え」力の各学年の到達目標は、以下の通りである。

### Grade 1 (中学1年生)

「言い換え」とはどのような操作か理解している「言い換え」のパターンのうち、いくつかについては、基本的なものなら、どのような操作か理解している。

### Grade 2 (中学2年生)

「言い換え」のパターンのうち、いくつかについては、基本的なものなら、自分でも操作することができる。

「言い換え」のパターンのうち、その他のものについても、どのような操作か理解している。

### Grade 3 (中学3年生)

「言い換え」の殆どのパターンについて、基本的なものなら、自分で操作することができる。

「言い換え」のパターンのうち、いくつかについては、より高度なものでも、どのような操作か理解している。

### Grade 4 (高校1年生)

「言い換え」のうち、いくつかについては、より高度なものでも、自分で操作することができる。

### Grade 5 (高校2年生)

「言い換え」のより多くのパターンについて、より高度なものでも、自分で操作することができる。

教科書本文の英文のいくつかは、「言い換え」のパターンを適切に使って、より簡単な表現に言い換えることができる。また、情報や(自分の)考えを伝えるとき、「言い換え」のパターンを適切に使うことができる。

### Grade 6 (高校3年生)

「言い換え」の殆どのパターンについて、より高度なものでも、自分で操作することができる。

教科書本文のより多くの英文を、「言い換え」のパターンを適切に使って、より簡単な

表現に言い換えることができる。また、情報や(自分の)考えを伝えるとき、「言い換え」のパターンを適切に使うことができる。

同時に、各学年およびコース末の到達目標に達しているかどうかを判定するための学年末「言い換え」能力レベル到達判定テストを作成した。

なお、これらテキストおよびテスト問題は全て、『中学1年生から高校3年生まで6年間で学ぶ英語の「言い換え」—自分の英語力で何とか言える発信力をめざして—』としてPDFファイルに納めた上で、WEBで公開する予定である(現在、一部さらに検討する必要があるため、公開を見合わせている)。

(2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

今回の研究を通して得られた成果のインパクトは、何と言っても、中高6年間を見通して、繰り返しながら発展的に学習ができる体系的な「言い換え」テキストが作成されたことである。

従来、散発的に行われるに指導されるに過ぎなかった「言い換え」の指導を、英語学習の初期から体系的に行うことの重要性と可能性が示されたことの意味は大変大きいと思われる。

(3) 今後の展望

以上のような研究成果をより有効に活用するためには、以下の2つが課題となる。

① 「言い換え」指導・学習用テキストの有効性の検証と修正

今回作成した「言い換え」指導・学習用テキストとテストについては、一部パイロットテストを実施し問題点を洗い出し修正に結びつけたものの、実際の使用までには至らなかった。今後は、教材とテストを実際に中学校・高等学校で使ってもらい、教員と生徒からフィードバックを得た上で、各ユニットにおける「言い換え」の実例、説明、練習問題および学年末、コース末の「言い換え」能力レベル到達度判定テストの項目を修正する必要がある。

② 「言い換え」指導・学習方法の有効性の検証と修正

各学年末、コース末の「言い換え」能力レベル到達度判定テストの教育現場での使用を促すと

もに、テスト結果データを収集・分析することを通して、中高6年間における「言い換え」指導・学習のシラバス、指導・学習の在り方に必要な修正を加え、より高いコミュニケーション能力育成のための指導・学習方法を考える必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

① Date, M., & Takatsuka, S. (2013). The effect of task repetition and noticing of forms on proceduralization of linguistic knowledge. *Journal for the Science of Schooling* (兵庫教育大学連合大学院教育実践学論集) 査読有, 14, pp. .

② Date, M., & Takatsuka, S. (2012). Effects of task repetition on oral performance of the same task and a new task of the same type. *Annual Review of English Language Education in Japan* (全国英語教育学会誌) 査読有, 23, pp.345-360.

③ Iwanaka, T., & Takatsuka, S. (2010). Effects of noticing a hole on the incorporation of linguistic forms: Cognitive activities triggered by noticing a hole and their effects on learning. *Annual Review of English Language Education in Japan* (全国英語教育学会誌) 査読有, 21, pp.21-30.

[学会発表] (計0件)

[図書] (計1件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

ホームページ等

<http://ed-www.ed.okayama-u.ac.jp/eigo/web/teacher/takatsuka/takatsuka/Publications.html>

「言い換え」指導・学習用テキスト『中学1年生から高校3年生まで6年間で学ぶ英語の「言い換え」—自分の英語力で何とか言える発信力をめざして—』(ただし、一部検討すべきところが残っている)

るため、夏頃まで公表を控える予定である。)

岡山大学・大学院教育学研究科・教授  
研究者番号：70132652

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

高塚 成信 (TAKATSUKA SHIGENOBU)

### (2) 研究分担者

なし